

2026年6月21日・グラウンドワーク三島・出版記念講演会

AI対話型・革新的書籍

**「ジャンボ・メッセージ」に込めた三島の過去と未来
ーグラウンドワーク三島による水辺のまちづくり・その極意とはー**



子どもたちが川遊びに興ずる清流を地域協働で取り戻した源兵衛川



特定非営利活動法人グラウンドワーク三島

専務理事 渡辺 豊博（農学博士）

質問は「AI ジャンボ」
に聞いてください。
2 次元コードから入植
していただければ、す
ぐに回答します。



場所：三島商工会議所 TMOホール

本講演は、「水の都・三島」の水辺再生、とりわけ、源兵衛川再生プロジェクトを中心に、市民・行政・企業のパートナーシップを軸とした、グラウンドワーク三島の 30 年以上にわたる取り組みについて、その経緯、理念、具体的な手法、将来構想を、渡辺が詳細に解説したものである。

1991 年時点の源兵衛川の深刻な環境悪化（ゴミの投棄、ヘドロ化、雑排水の垂れ流しなど）と、源兵衛川をコンクリートで埋設する行政計画が進行していた危機的な状況を阻止・中止させるべく、渡辺が市民運動としてグラウンドワーク三島を設立して、その実現の推進役とした。

英国のグラウンドワークが提唱する「市民・行政・企業が 3 分の 1 ずつ社会的責任を分担するパートナーシップ」の理念を導入、地域リーダーへの聞き取りや住民との約 200 回にわたる対話を重ね、ファシリテーションを通じて、合意形成を図ったプロセスを述べた。

活動は環境再生に留まらず、まちづくりの哲学、専門知識の重要性、多様な人々との連携、そして、台湾の観光協会との連携による国際観光ハブ構想へと発展した。

一貫して、目先の利益ではなく、30～50 年後の未来を見据え、市民の主体性を引き出し、地域の財産である水と緑を守り育てることの重要性を強調している。

発言のポイント

1. 三島の水環境と再生プロジェクトの背景

- 「水の都・三島」の劣化と問題認識 (1991 年頃)
 - かつての三島は街中に水が溢れる「水の都」だったが、1960 年代後半から環境が悪化。源兵衛川はゴミ捨て場と化し、ヘドロが蓄積していた（1991 年 4 月 4 日の写真が記録）。
 - 背景には、河川をコンクリートで埋めて、駐車場などにする全国的な事業の潮流があり、三島でも源兵衛川の埋設計画（約 15 億円規模）が進行していた。
 - 下水道は中心市街地で普及率 100% 近くだったが、川沿い住民の接続率が低く、下水が垂れ流しのままだった。
 - 中郷用水組合は年間 500 万円の維持管理費を投じてても環境は改善せず、行政も現場介入に消極的で責任回避の構造があった。
- グラウンドワーク三島の設立と戦略
 - 渡辺は公務員の立場では、埋設計画を止められないために、市民運動として「グラウンドワーク三島」を立ち上げ、源兵衛川再生を最初のプロジェクトに選定した。
 - 「誰かがやらねば三島は終わる」との危機感から、約半年で 75 名の地域リーダーに聞き取り調査を実施。当初は「県庁職員には無理」と悲観的な意見が多かったが、対話を重ねて、支援のネットワークを構築した。
- 三島の地下水と広域連携の重要性
 - 三島の地下水は、溶存酸素量が他地域の 5 倍と多く、これが水質やバイカモ生育の要因となっている。水源は富士山だけでなく、愛鷹山や箱根の水も地下で合流している。
 - この地下水の正しい仕組みを理解することが、上流域の長泉町、裾野市、御殿場市との連携の理解と重要性につながる。

2. グラウンドワークの理念と実践方法論

- 英国グラウンドワーク連合体とのパートナーシップ契約を締結
 - 英国のサッチャー政権下で提唱された「パートナーシップ」の理念を参照。市民（汗をかく）・行政（補助は出すが口は出さない）・企業（利益を社会に還元）が、それぞれ 3 分の 1 ずつ社会的責任を分担するモデルを導入した。

- グラウンドワーク三島は、これら三者の調整・仲介役（コーディネーター）を担う。
- **市民の主体性を引き出すプロセス**
 - トップダウン型の計画を批判し、民主主義の基本として、住民の主体性を重視。源兵衛川周辺で約 200 回の話し合いと延べ 2 万人の住民との対話を行い、住民が「自分ごと」として課題を捉える「大人の学校」として機能させた。
 - ファシリテーションの専門性を活かし、住民の意識を引き出し、合意形成へと導いた。
- **活動を支えた人々（パートナーシップの具体例）**
 - **緒明理事長**: 元銀行マン。資金難の際に個人として多額の活動資金を支援するなど、活動の精神的・経済的支柱になった。
 - **速水さん（栄設計社長）**: 13 年間にわたり事務所の家賃や職員の給与を負担してくれた。
 - **中川さん**: 広範な政財界、文化人などの人脈を活かし、通常会えない人々との橋渡し役を担った。
 - **加藤さん（象設計集団）**: 建築家として設計アドバイスを提供してくれた。
 - その他、多くの市民団体（三島ゆうすい会、源兵衛川を愛する会、桜川を愛する会等）の設立を支援し、「総力戦」でまちづくりに取り組んだ。

3. 環境デザインと具体的な整備事例

- **環境デザインとエコロジーアップの理念**
 - 工事によって環境が破壊されるのではなく、逆に環境が向上（エコロジーアップ）する設計・施工を指導。源兵衛川全体を 8 つのゾーンに分け、7 つの特性（親水型、生態保全型など）に基づきデザインした。
- **水辺の遊歩道（溶岩ブロック）**
 - 水を通す溶岩ブロックを使用し、コケやホタルの産卵場所を創出。ブロック間に隙間を作り魚の隠れ家とするなど、生物多様性に配慮。意図的に歩きにくくして、安全性を確保した。
- **南本町グラウンド横エリア**
 - コンクリート護岸を撤去し、川幅を拡張。流れの速い本流の他に緩やかな小川を造成し、小魚の生息数を 5 倍に増加させた。

- **中郷温水池エリア**

- 過去に死亡事故があった溜池を改修。ヘドロを浚渫し、中之島や植樹により森のような景観を創出。フェンスをなくして見通しの良い安全な池へと再生した（合意形成に3年以上）。

- **施工業者との協働**

- 工事前に植生を調査し、工事中に別場所で保育・工事後に再移植するなど、環境への影響を最小限に抑える手法を導入。施工業者の理解と協力が不可欠だった。

4. 未来に向けた計画とまちづくりの哲学

- **第二期三島改造計画：川に向かう街づくり**

- 川の整備（第一弾）に続き、建物の玄関を川側に向けるライフスタイルを提案。川沿いの空き地や空き家を活用し、「水のテラス」「水のレストラン」などを整備し、新たな回遊性を生み出す。

- **御殿川沿いの整備と活性化**

- 人の流れが限定的な現状を打破するため、御殿川を整備して、佐野美術館地域に誘導する新ルートを創設。これにより、空き家が増えているエリアを「伊勢のおかげ横丁」のように活性化させる構想を提案。

- **国際観光ハブ構想**

- 源兵衛川から柿田川へのコースが「台湾千里歩道協会」に高く評価されたことを受け、**2026年7月**に同協会および台湾の旅行会社と連携協定を締結予定である。富士山のルートも加えて、ハブにする計画を、税金を使わず自己資金で推進していく。

- **活動を続けるための哲学**

- **持続可能な組織運営:** 補助金だけに依存せず、受託事業や会費など複数の収入源を確保する経営視点が重要である。
まずは、行動、小さな成果と信用を積み重ねることが次の資金や仲間を呼び込む。
- **行政との関係:** 行政とは下請けでも敵対でもなく、是々非々の姿勢で対等な「提案型パートナー」関係を築くべき。

互いの強みを活かし、担当者の異動に左右されない組織としての信頼関係の構築が大切である。

- **次世代への想い:** 活動の原動力は「地域の宝物を次の世代に残したい」という想い。

子どもたちが川で裸足で遊ぶ、楽しむといった五感を通じた原体験が、地域への愛着・愛郷心を育む。活動の真の成果は、賞や評価ではなく、未来の担い手が地域に育つことにある。

- **外部評価の重要性**

- 30年以上にわたる活動が 2025 年度「グッドデザイン賞金賞」を受賞し、「土木デザインのレジェント級」と評価された。
- こうした外部評価は、①市民の誇り、②次世代への継承、③行政・企業との協働促進、④他地域への波及、という大きな効果をもたらした。